

きつと運命の人

三
カ
月
一
月

《上》

ラグビーの試合を観てる。ルールなんてわからないけど。

試合といっても紅白戦。二軍一軍で分かれているのか、それとも均等になるように分けられているのかはわからない。どちらも真剣にやっているというのは伝わってくる。時折作戦を確認したりしているのか試合が止まって、顔は知っている程度の先生の怒声が聞こえることもある。

目を細めたくなる青空に、名前も知らない連中の声が響く。グラウンドは本来サッカー部と半分ずつ使用しているが、週に一回、全面を使って練習する日があって、昨日はサッカー部が全面を使って練習をしていた。ラグビー部は隅の方でパスやタックルの練習をしていた。今日はサッカー部がパスやフットワークの練習をしている。

どうでもいいんだけどね、そんなこと。

僕が見ているのはラグビー部ではあるけれど、むさ苦しい男たちの熱い練習風景ではない。高い声を張り上げて、何やら書き込みをしつつ彼らのサポートをしているマネージャーの方だ。

三人いるが、その中でも僕はひとりはずっと追っている。日焼けをしている選手たちよりも肌が黒くて、肩より長い髪を三つ編みおさげにしている彼女。学校指定のジャージはいつでも清潔感を漂わせている。着る機会があまりない僕のものとは比べても大差ないくらいだ。

放課後は、楠木奏さんを見守るのが僕の日課。自分でもなかなか気持ち悪いとは思うけど。

でも僕にはこれくらいしかできない。だからいいじゃないかと開き直るわけでもないけれど、彼女やその友達がキモいマジやめてとか言ってくるまでは続けさせてほしい。クラスは三年間一度も同じクラスにならなかったし、選択授業はかすりもせず、彼女は電車通学で僕は徒歩。委員会も実益を兼ねて保健委員会しか選べない僕には、彼女が同じ委員会を選んでくれることを祈るしかなかったけど、届きはしなかった。

だからこれを不許可とされてしまうと、もう僕にはどうしようもない。保健室の窓から彼女の可憐な姿を網膜に焼き付けてるだけだから、どうか御慈悲を。

「君も飽きないね」

「日課ですからね」

「むっつりスケベだ」

「いや、ほぼストーカーかと」

「自分で言うかね」

養護教諭の田村先生は、苦笑いを隠さない。その苦さを珈琲へと変えて、僕に差し出して来る。ブラックは苦手だと知っていてブラックをわたして来る。

さっさと帰れという意味と「さっさと帰りな」という言葉をそえて。対策として僕はスティックシュガーとマイマドラーを常備している。我慢して飲んで、ブラックが飲めるようになったらかっこよかったかもしれないと、少しだけ、思ってる。

甘くした珈琲をすする。この甘さと苦さが混じり合っている感じが結構好きだから、たぶん僕は一生ブラックは飲めないと確信している。これは僕の恋の味なんだ、なんてね。

「話しかけてみたらいいのに」

「運動部のマネージャーをしている人に虚弱の僕が？」

「卑屈だなあ」

「釣り合いの話ですよ」

「釣り合わせる努力をしてみたまえ若者よ」

「……ああすいません一瞬意識が」

「軟弱者」

「言わないでください」

きっと、話すことはできる。話してしまえば結構簡単に。何度も脳内でシミュレーションは重ねているし、人見知りする方ではない。ジョークを交えたトークなんてものは無理だけど、二言以上は会話できるはずだ。

それなのに彼女に話しかける勇気がわからないのは、我ながらどうしてなんでしよう神様。僕が虚弱な理由と一緒に教えてください一四〇字以内で。

もう三年生になってしまい、受験も始まる。ストーカーまがいのことをしているけれど、本物になるほど根性も素質も妄想力もないから、彼女の進学先がどこなのか、そもそも進学するのかどうかとも知らない。きっとこのまま卒業を迎えて、この恋心も、いつしか思い出になっていくんだ。綺麗に美化されて。事実と違うことなんかも付与されるかもしれない。

帰り道でたまたま出会って、そのまま二人で寄り道をして帰って、それがきっかけで話すようになったとか、同じ委員会で仕事をしていたとか、実は部活が一緒だったとか。どうしてだろう、すごいはっきり想像できる。僕の妄想力も捨てたものじゃないみたいだ。本当にストーカーにならないように気をつけよう。

気がつけば半分ほどなくなっていたマグカップは、少しだけ軽くなっている。黒い水面から湯気が上がっている。それをじっと見つめていると、スクリーンに映画が上映されるように、自分の妄想が上映されそうで、目を凝らした。妄想だけでもいいんでどうか彼女と仲良くしている自分を是非。

やはり鮮明に描ける。僕はもしかしたら映画監督の才能があったり？

バカっぽいと自分で自分を笑うと、それを咎めるかのように、何か鈍い音がして、近くにボールが弾むような音がした。